

へぼ暮



この「詩とエッセイ」に参加させて頂いて十回目となった。その月ごとに関心のあったことを取り上げて書いているが、遠くにいる友人などに抜き刷りを送ると私の日常がよく分かると好評なので、気をよくしてあちこちに送っている。それがなんとしかつめらしい短歌の機関誌にしき江「六月号」に「麻雀」が載ったのだから驚いた。

歌仲間の誰かが転送して下さったのかと思ったら、どうやら私が鶴田主幹にお送りしたらしい。多分その時は、新入りの私の自己紹介にと思つてのことだったと思つ。早速先生へお葉書を出した。

びっくりしました。『へぼ暮』というのも書けそ

うですが、これでは到底真面目に歌の勉強をする人とは認められなくなりそうなのでやめておきます。

とは云つものの暮との付き合いも長いのだから、やはり一寸は言及しておくべきかなと思いなおした。付き合いと言つても別にそれほど対戦歴があるわけでもないのだが。

一九七〇年三十五才の私はコンピュータのプログラマーとしてF電機に入った。その八年ほど前から私は家計を補つべく学習塾を開いていた。それが又大変な繁盛で、毎日四時から九時まで、五六十人の子供たちが交代でやって来る。夕食の一時間を挟んでのてんでこ舞いの忙しさの連続だった。

しかし子供の成長につれ子供たちが学校から帰ってきたころに私が忙しいのはよくないだろう、昼間勤務出来る仕事はないかと思ひ始めていた。当時はコンピュータが漸く実用段階に入り、雨後の筍のようにコンピュータの学校が出来ては、また消えていくという時代だった。新しもの好きの私は、

そんな学校の一つに、若者に混じって一年間勉強し、卒業した。その後、近くにあったF電機の事務管理室に嘱託として勤め始めたのだ。

当時F電機全社員二万人のうち、東京工場は二千人の工員を擁していた。外注さんやパートさんも入れば四千人近かったのではないだろうか。

その工場の頭脳であった事務管理室は、W大やK大卒などの優秀な若者が集められて、事務や製造の様々な業務を、コンピュータによって処理させるためのシステム作りという新しい仕事に懸命に取り組んでいるところだった。

データやプログラムはIBM80欄カードで、それにパンチするパンチ室もそこに所属していた。若草色のピロードのカーテンに包まれたパンチ室は、美人のパンチャーが三十人もいる華々しい職場だった。

システム担当の女性といえば、私より七才若い津田塾大学数学科出身の才女と二人だけだった。二人とも主婦だったから、嘱託という身分で、一日六時

間の勤務でよいという契約だった。当時はまだ珍しい職種だったこととて、工場としては高額な報酬で優遇してくれたのだった。

二年ほど過ぎた頃、川崎からひ弱そうな若者が転勤してきた。大変な囲碁好きで、昼休みに折り畳みの碁盤と碁石を持ち出して、私に手ほどきしてくれた。そして工場の囲碁クラブに入れという。仕事の面では職員に一目が二目置かれていた私に、きっと素質があると思ってくれたのだろう。実は、その期待は大外れに終わってしまったのだが。

囲碁のルールは単純である。交互に打って周りを全部囲まれたら死んでしまい、相手に取り上げられてしまう。最終的に取り上げた相手の石で相手の領域を埋め、それぞれの領域の広さを競うのだが、この単純なゲームがなかなか一筋縄ではいかない。

下手(ひた)は黒を持つ。実力に応じて最初にハインドとして何目か置かせてもらってからスタートする。盤面は真っ黒で、黒の陣地ばかりと思いきや、あれよあれよと二つ間にみんな取り上げられてし

まつのだ。

工場の昼食は殆どの人が会社差し回しのお弁当である。五十円ほどの差で赤、黒の二種類があつて、どちらも二段のプラスチック製の弁当箱である。上におかず、下にご飯が入っている。昼休みになるとドアの外に配されたお弁当の三千個ほど入ったケースを、部屋の中央に運ぶのだが、それはいつか男性の仕事となつたが、昭和四十年代はまだ女性の仕事だつた。お茶当番の女性一人がそれぞれの湯飲みにお茶を入れて配る。

昼休みは四十五分間で、早食いの若者たちは十五分もするとみんな外へ飛び出す。広い芝生の緑の上に、男女が混じつていくつかの大きい輪をつくり円陣パスをするのが日常だつた。拳を上げて打ち込むのが楽しい。制服の薄い水色の半袖の上で張りを翻して、すらりとしたパンチャーが飛び上がる。下は殆どブラジャーしか着けていない。男性ならずとも眼福の思いをしたものだ。

私は囲碁のおかげで、昼食後はそそくさと会議用

のテーブルに碁盤を広げるようになった。黒をばらまいた盤上に先生の「Kちゃん」がパチリと白を打つ。対応する私に

「そこに打つたら、こつなつてしまつたろつ。こつ受けなくちゃあ」

と彼は石を置きなおす。

「はい、ではこつです」

と、この世界での私は至つて素直である。そのうち自称二段が転入してきた。新人も出現したので、私は新人同志との対戦の日々になつた。これは流石に泥試合である。

雨の日はバレー組が背後に何人も立つて観戦である。その野次馬がまたうるさい。

「それではお目目が一つになつてしまつぞ」ほれ、それは五目中手だ」

十三級ということに入った囲碁クラブだが、クラブで何勝かしないと級は上がらない。対戦は就業時間の後だから、五人目の子供が生まれ、保育園の送り迎えのある私には参加することは不可能で、万年

の十三級である。それでも年一回行われる大会は休日にかれるので、毎年出席していたのだが、それも一勝した記憶しかない。早暮ばかりだったので、じっくり読み切るまで相手を待たせるだけの押しが身に着いていない。それに紅一点の私に負けたとあつては名折れとばかりに、相手は力を入れているようだ。

F電機を去つてもう十年になる。それ以後は日曜日のNHKの囲碁トーナメントを見るくらいになつてしまった。しかし振り返ると純朴な工場の人たちとの思い出と、今もテレビとはいえ囲碁の観戦を楽しめるということとは、これまた私の人生の財産の一つなのだと思つのである。

(平成8年7月)